

「孔乙己」に秘められている二重性の意味に関する考察

A Study on the Significance of Duality in *KongYiJi*

張 瓊華
Qionghua ZHANG

Keywords : Working class, privileged class, human essence, state of survival

キーワード：労働者階級、特権階級、人間の本質、生存状態

1 はじめに

本稿は、近代中国文学史上著名な作家である魯迅が1918年に書いた「孔乙己」という短編小説がいったい何を描こうとしているのかを、一人称の語り手と、孔乙己という名前に秘められている二重性の意味に着目し、これまでの先行研究と異なる視点で検討したい。

中国において、この小説が書かれた時代は、ちょうど封建的王朝時代から近代国家へと移行しようとする時期であったが、その過程でさまざまな問題に直面していた。1912年に清王朝が倒され、中華民国が樹立されたにもかかわらず、1915年12月に袁世凱が皇帝に即位し、帝政を復活しようとした。帝政反対運動により、1916年3月に帝政が取り消されたが、その後、中国は数年間にわたって軍閥による割拠状態に陥った。そのため、同じ時期に、民衆の意識を変えようとする新文化運動（1916年～1921年）が展開され、エリート層や文学家は民衆を啓蒙する役割を果たしていた。そうした時代を背景に、作家魯迅は小説を書き、多くの傑作を出している。

本稿で取り上げる「孔乙己」は、魯迅が1918年に執筆し、1919年4月に『新青年』の第6巻4号に掲載された小説である。この小説は、「狂人日記」に次いで魯迅の二番目の作品となる。1918年に『新青年』に掲載された最初の作品「狂人日記」は、正常者でない「狂人」の口を借りて、人が人を食う社会を発見し、大きな反響を巻き起こすことになった。翌年に出された「孔乙己」は、語り手の「我」（私）が20年前に居酒屋で働いた際に、当時12歳の自分が見た科挙試験の落第者である孔乙己の惨めな人生を語ることとなっている。落ちぶれた孔乙己が居酒屋で周りの人に嘲笑われて、さらに地域の偉い人に足を折られ、いつの間にか死んでしまったという物語である。この作品は3000文字も満たない短いものであるが、内容も形式

も極めて高い評価が得られている。

中国国内では、「孔乙己」の内容やモチーフに関する解釈については、朱棟霖は、「科挙制度の下で、田舎の読書人の落ちぶれた人生を的確に深く描き出し、孔乙己の境遇を語ることで、科挙制度の不合理性、さらに薄情な人々を描いた」¹⁾（朱棟霖ほか、57～58頁）と指摘している。このように、この小説が孔乙己の悲惨な人生を描くことで、科挙制度を批判していると同時に、酷薄な民衆をも批判しているとの見解はこれまで一般的であり、かつ定着している。また、21世紀に入ってから、美学的な側面からこの作品の形式を評価している学者もいる。例えば、有名な文学評論家の劉再復は「孔乙己」を、「中国短編小説の優秀な手本であり、高い模範的意義を有し、中からほかの小説から得られない美学的ものと創作的ものを吸収することができる」²⁾（劉再復、2011、241頁）と高く評価している。

しかし筆者としては、いくつかの疑問を感じている。1つは、科挙制度が1905年にすでに廃止されたが、1918年になってから、20年も前の出来事を思い返して、わざわざその廃止された制度を今さら批判する意味は果たしてそれほどあるのだろうか。まして小説の中にそれを批判する言葉がいっさい見られないのではないか。もう一つは、「それは20年前のこと」という一言が小説の最初の部分に書き入れているが、それは明らかに現在の自分が20年前の自分を見つめていることとなっているが、これまでの研究はこの二重の自分が使われていることの意味を見落としていないか。第三は、登場人物の名前の付け方に違和感を覚え、そこには何らかの意味が秘められていないのか。

日本では、竹内は「孔乙己」の構成と描写の仕方に注目し、次のように評価している。「短編小説としての構成の巧みさと、描写の綿密さは魯迅の作品の中でも、第一流であり、ほとんど無駄がない」（竹内、125頁）と。それから、「孔乙己」のモチーフに関しては、代田が新しい知見を深めている。代田は一人称の語り手に着目し、そして「それは20年前のこと」にも触れ、「それは、この小説が一九一八年に書かれたから、場面が十九世紀おわり、清朝末期を指し示すという時代設定のことではない」と見ており、「私は十二才から、村の入り口にある咸亨酒店で店員（丁稚）をやっていた」という語りと関わるからである」（代田、56頁）と指摘している。

代田はさらに、語り手の視点は次の四つがあることを見出している。第一の視点は、語り手は店主や短衣幫（短衣者）と同じ視点にいる。つまり、短衣幫と同じく孔乙己を笑う側にいるということである。第二の視点は、語り手は独自の位置から、孔乙己を相手にせず、侮蔑しているというものである。第三の視点は、侮蔑する側に加担することなく、居酒屋にいる者の薄情さ、酷薄さを、じっと見つめているということである。第四の視点は、20年前の自分と現在の自分は合致し、孔乙己を蔑む周囲の者とは一線を画して、その運命を思いやっているということである。つまり、現在の自分は悔いているに近いというのである。代田はこれが啓蒙者たちに警告を発しているだと考えており、啓蒙者に啓蒙する姿勢のなかに、人を蔑む心理が隠されていないかを問いかけていると結論付けている（63～70頁）。

筆者から見ると、第一、第二及び第三の視点については一理があり、納得しているが、第四の視点については小説から必ずしも感じ取れるとは言えない。まして20年後の語り手の「いまでも覚えている」の理由は、小説の中ではっきりと「笑える」からだと言っているのである。「悔いている」という心情が読み取れない。また、当時12歳の自分の行いを現在反省すべきものなのであろうか。むしろ「それは20年前のこと」という叙述には、現在の自分が、子ども頃の自分を見つめている様子が窺えるのであろう。

以上のように、「孔乙己」の内容とモチーフについては、科挙試験への批判、酷薄な民衆への批判、そして啓蒙者に対する啓蒙の三つがあることはすでに明らかにされている。しかしこの作品を論ずるにあたって、少なくとも以下の二つの謎を解き明かす必要がある。

一つは、一人称の語り手の二重性の問題である。小説の最初のところに一人称の語り手がさりげなく「それは20年前のこと」と語っているが、別にこの一言がなくてもまったく不自然さがない。むしろ孔乙己の悲惨な人生を語るなら、余計な一言だとさえ思える。それに、竹内はこの小説に対して、描写に「無駄がない」と評価している。ならば、この一言は余計な存在ではないはずであろう。多くの研究者はこの一言を見落とし、取り上げてこなかった。実際、それはまるで現在の語り手の目の前に一枚のスクリーンがあり、画面には20年前の自分が映し出されており、それを見つめているのは現在の自分であるように思える。従って、この一人称の語り手は明らかに二重性があると考えられる。本稿では、現在の語り手を「我」とし、20年前の自分を「己」とし、その二重性に秘められている意味を解明したい。

もう一つは、主要な登場人物の名前に使われている文字が何を意味しているのかという問題である。登場人物は、20年前の「己」、主人公の孔乙己、短衣者と長衫者のほか、客のおしゃべりに出てきた「丁」という姓の拳人旦那などがある。「孔」はという姓を除いて、偶然にも、乙、己、丁の三文字は十干³⁾にある文字である。それは古代中国では、日付に使われるもので、10日ごとに繰り返されるものである。そこで、十干にある文字を登場人物の名前として用いられていることには、もう一つの意味が込められているのではなかろうか。本稿では、作品の内容を検討した上、それについて考えてみたい。

「孔乙己」の読み方について、代田は、「最近の若い読者は、滑稽であること、ユーモアを供することにはほとんど全面的な信仰を抱いているらしい」（代田、54頁）と指摘している。そうなると、この傑作が誤読されてしまう。そこで、この作品を以上の疑問点をもって改めて読み解く必要がある。

本稿では、以上の二つの謎を解くことで、この作品を再考したい。具体的には、まず、魯迅小説の登場人物の名前の付け方と語り手について概観する。次に、「孔乙己」の登場人物と「己」の立ち位置、そして孔乙己の存在と消失について検討する。最後に、分析の結果に基づいて作品に秘められている二重性の意味を考察する。

2 魯迅小説の登場人物の名前の付け方と語り手

魯迅のよく知られている小説を読んでいくと、登場人物の名前の付け方は、凡そ四つのタイプに分けられよう。

一つは、主要な登場人物の名前についてまったく触れていなく、一般の小説と同様に、ごく自然に使っているタイプである。例えば、「藥」の中の華老栓、「在酒樓上」の中の呂緯甫などがそれである。この場合、作者はその名前の由来についていっさい語っておらず、読者もとくにそれに対して違和感を覚えないものである。

もう一つは、登場人物の名前の由来について簡単に触れたタイプである。例えば、「故郷」の中の潤土という名前については、次のように説明している。「……前から潤土の名前は聞いており、この子が僕と歳も近く、閏月の生まれで、五行説の土に欠けるので、彼の父はこれを補って潤土と名付けた、ということも知っていった」（藤井訳、54頁）。これは、親がなぜ自分の子どもの名前をそのように付けたのかを説明したものである。これに対しても読者はとくに疑問に思わないものであろう。

三つ目は、作者が登場人物に名前を付けて、しかも、わざわざその付け方について説明を加えているタイプである。例えば「阿Q正伝」では、なぜ主人公の名前を「阿Q」にしたのかを詳しく説明している。この場合、その名前はだいたい読者が聞きなれないもので、しかも妙に感じるものとなる。それに関する考察は、すでに別の論文で取り上げている（張、2020）。

四つ目は、主人公の名前は周りの人が付けたあだ名だと言うタイプのものである。「孔乙己」の中の孔乙己がその例である。作者は小説の中で次のように説明している。姓は孔なので、周りの人が習字のお手本にある「上大人孔乙己」というわけの分からぬ言葉から三文字を取り出してあだ名とし、孔乙己と呼んでいる。周知のように、十九世紀末までの中国では、まだ近代学校教育が導入されていなく、識字率もきわめて低いため、労働者はほとんど読み書きができなかった時代だった。ですから、文字の読めない労働者は、人にあだ名を付けることがあったとしても、習字のお手本から孔乙己というあだ名を付けたとは考えられない。したがって、孔乙己という名前は、もともと作者が付けたもので、周りの人々の口を借りたに過ぎないと考えられる。わざわざあだ名を付けた以上、そこにはきっと何かの言外の意味が隠されているとしか思えない。

小説は虚構の物語を表現する作品で、三人称の語りを使われているのが一般的である。『封神演義』、『三国演義』、『水滸伝』、『西遊記』などの中国の古典小説も、例外なく三人称の語りで、起伏に富んだストーリーの展開が重視されている。中国の近代小説の始まりとも言われている魯迅の「狂人日記」は、伝統的小説の語り方とは異なり、日記の形式で、一人称の語り手が自ら経験したもの、感じているもの、考えているものを語ることで、人食い社会を暴露している。魯迅のほかの小説、例えば、1919年の「孔乙己」、1921年の「故郷」、1924年の「祝福」と「在酒樓上」、1925年の「傷逝」、1926年の「孤独者」なども一人称の語りで、語り手の「我」も登場人物の一人である。これらの小説の中で、「我」が登場し、自らの見聞を叙述した

り、主人公と対話したりして、近代社会が形成されていく際、啓蒙者としての呐喊、葛藤、彷徨など心情が描かれている。中でも、「孔乙己」は、「それは20年前のこと」から分かるように、20年後の「我」が20年前の「己」と周りの人を見つめていることとなっている。わずかに数字しかない叙述なので、これまであまり注目されてこなかった。

3 「孔乙己」の登場人物と「己」の立ち位置

作者は、「孔乙己」の中で、咸亨酒店という田舎町にある居酒屋を舞台として設定し、そこに登場させている人物は貴族でもなく、英雄でもなく、ごく普通の庶民である。そして読者を惹きつける起伏のあるストーリーの展開もなく、庶民が登場し、おしゃべりをする場面となっている。以下では、小説の内容に沿って、登場人物と「己」の立ち位置について見てみる。

3.1 咸亨酒店と登場人物

小説の初めに、咸亨酒店を紹介している。咸亨酒店は、魯鎮という田舎町にあり、大通りに面している。店の中には曲がり尺型の大きいカウンターがある。カウンターの内側は熱燗をつけるところで、外側は労働者たちが立ち飲み食いをする場である。

この居酒屋は、その地域に生きるさまざまな人に利用されている。来客は、大きく短衣階級（短い服を着ている労働者階級、短衣者）と、長衫階級（長衫という長い服を着用している士大夫階級、長衫者）という二つの階層に分けられる。短衣者は、昼や夕方に仕事が終わると、店に入ってきて、銅銭4文を出して、お酒を頼んで、カウンターの外側で突っ立ったまま飲む。一方、長衫者は、店に来たら、悠然と（踱進）奥の部屋に入っていく、椅子に腰をかけて、ゆっくりとお酒や料理を楽しむ。奥の部屋は外側の部屋と壁で仕切られている。ですから、同じ居酒屋を利用している、飲む空間は階層によって分断されている。短衣階級と長衫階級は、それぞれ分断された空間で飲み食いし、交わる場面が一切見られない。部屋が壁で仕切られているように、この二つの階級の間には見えない壁が存在している。

咸亨酒店の来客は、長衫者と短衣者のほか、長衫を着ているが、短衣者と同じところで立ち飲み食いする人もいる。それは、主人公の孔乙己という人物である。孔乙己は、中国で千年以上踏襲してきた官僚の採用試験である科挙試験（587年～1905年）の落第者である。この試験は読書人（知識階級）にとって、出自や家柄に関係なく、唯一上昇移動できる手段であった。科挙試験は、院試、郷試、会試、殿試という四つのレベルがあり、一つのレベルを通過したら、次のレベルの試験を受けられることになっている。一番低いレベルの院試に合格したら、秀才（生員とも言う）の資格を得られ、次の郷試をパスしたら、挙人となり、会試に合格したら、貢士となり、そして最高レベルの殿試を通過したら、進士となる。初級レベルの院試にも合格できなかった孔乙己は、落ちぶれ、困窮し、結局士大夫階級にも属さず、労働者階級でもない者となっている。

このように、咸亨酒店はその地域のさまざまな人が登場してくる場となっている。階層によって、着衣、振る舞い、飲む空間などが異なっている。そこでの出来事は社会の一断面を反映することができ、社会の縮図と言えよう。

3. 2 20年前の「己」の立ち位置

語り手は、咸亨酒店を簡単に紹介し、お酒の値段に触れた上、さりげなく、「それは20年前のこと」だと言いつけている。それから、現在の語り手の「我」が当時の「己」について語り始める。さて、20年前の「己」はいったい何者で、どんなことをしていた者であるかを見よう。

「己」は12歳の子どもで、咸亨酒店で店員（丁稚）として働いている。店主から見ると、気が利かない子なので、偉い長衫のお客様への対応には任せられない。また不器用なので、短衣者への対応も無理だ。というのは、客の目を盗んで、バレないようにお酒に水を加えたりする必要があるので。だが、客側もそう簡単には騙されない。短衣者は、お酒をかめから汲み出すところを確認し、お燗用のチロリに水を入れていないかをチェックし、さらにチロリが熱湯に入れるところをじっと見ているからだ。こんなに厳しく監視されている中、水を混ぜるなんて「己」には到底できないことだ。そのため、店主に「お前はこんな簡単なこともできんのか」と怒鳴られているが、顔の利く人の紹介だったので、辞めさせられることはなかったが、結局、カウンターの内側に立って、お燗をつけるという単調で退屈な仕事に回されている。カウンターの内側に立っている「己」は、客の様子を余すところなく見渡せる。店主は恐い顔をしているし、短衣者はいつも機嫌が悪い。こんな雰囲気の良い店で、孔乙己が店に来る時だけ笑えるのだ。だから、今でも「我」が当時の出来事をはっきりと覚えているのだ。

小説では、当時の「己」の身の上に触れてはいないが、読み書きを習ったことから、もともと裕福な家のお坊ちゃんだったと思われる。だが、子どもであるにかかわらず、居酒屋で働かなければならないことから、家がすでに没落したはずなのであろう。実際、魯迅の本名は周樹人という。祖父の周福清は、科挙試験の最高レベルの殿試までに合格し、進士となり、県知事を経て、朝廷の高級官吏を勤めた。父親の周伯宜は、科挙の初級試験に合格し、秀才となったものの、挙人までには到達できなかった。周家は地元の名家で、士大夫階級に属していた。しかしその後、祖父は下獄し、父親は病気で倒れた。13歳の魯迅が質屋と薬屋に出入りし、周りの人の蔑みの中で少年時代を過ごしていた。新島が「酒屋の小僧は、もしかしたらそうだったかもしれない自分の姿である」（新島、119頁）と述べているように、「己」には作者の影が見られよう。また、代田が「実は「私」と孔乙己は、近似していることだ」（代田、64頁）と言っている。

このように、20年前の「己」は、短衣階級にも、長衫階級にも属さない者で、孔乙己と大して変わらない境遇にあろう。

4 孔乙己の存在と消失

咸亨酒店という表舞台に登場してくる者の中に、唯一名前のある人物は孔乙己だけである。ただし、その名前はあだ名だと説明されている。カウンターの内側に立っている「己」は、周りの様子をじっと見つめ、時には、笑い側に加担している。以下では、短衣者、周りの人などの名前が付けられていない人々を「君たち」と呼ぶことにしよう。次に、物語の展開に触れながら、「己」が見た「君たち」と孔乙己との関わり方を検討する。

4. 1 「君たち」と孔乙己

孔乙己の外見とその名前の由来については、小説は以下のように叙述している。

孔乙己は、立ち飲み客の中に唯一長衫を着ている者である。彼は背が高く、顔が青白く、皺に間にはいつも傷跡があり、そしてぼうぼうのごましおのひげを生やしている。長衫を着ているが、その長衫は汚くて、破れていて、もう10年以上洗っていないようだ。孔乙己は、話す際、いつも最後に「なり・けり・あらんや」など、わけの分からないことを口にする。姓は「孔」である。それで、ほかの人が習字のお手本にある「上大人孔乙己」という意味の分かるような分からないような言葉から、「孔乙己」というあだ名を付けた（童秉国ほか編、15頁）⁴⁾。

ここでは、孔乙己の服装、外見、喋り方及びその名前の由来を叙述することで、孔乙己の特異性を前面に押し出している。近代までの中国では、身分の高い人や士大夫（知識階級や科挙に合格して官職についた者）は長衫を着ていた。また、小さい時から私塾に通い、読み書きや儒学を習い、科挙試験の合格を目指している読書人も長衫を纏っていた。要するに、長衫は、ステータスや身分の象徴となるものであった。読書人の孔乙己は、科挙の初級レベルの試験にさえも合格できず、「秀才」にもなれなかったが、下層知識階級のプライドを捨てられない。汚くても、破れていても、なお長衫をずっと着ている。また、落ちぶれていて、短衣者と同じ場所で飲んでいるにもかかわらず、口では短衣者にとって意味の分からない文語文の「なり・けり・あらんや」を言っている。孔乙己の出自や困窮した原因についていっさい触れていないが、読書人であること、そして長衫を纏っていることから、もともと裕福な家か長衫階級の出身であったと思われる。

孔乙己が店に来ると、「君たち」は彼に向かって嘲る。「孔乙己、顔にまた新しい傷ができたね」と声をかける人がいる。彼は、その人を無視し、カウンターに向かって、「熱燗二つ、茴香豆一皿」と注文し、銅銭9枚を出してカウンターに並べる。「お前は、きっと、また人の物を盗んだよね」と言われると、彼は目を大きく見開いて反駁する。「根拠もないのに、人の潔白を汚さないで」と。すると、「なにが潔白だい。一昨日俺がこの目で見たよ、お前が何家の本を盗んだから吊るされて殴られたのを」と言い張る人がいる。孔乙己は恥ずかしくて、こう

弁解する。「窃書は盗みじゃない……窃書！……読書人のことだから、盗みとは言わないよ」と。それから、わけの分からないことを言い出す。「君子固より窮す」とか、「あらんや」とかで、「君たち」はどっと笑い出し、酒店の内外に笑い声が満ちている。

孔乙己を嘲笑う場面が映し出されてから、作者は、孔乙己について人から聞いた話で次のように紹介している。孔乙己は以前、私塾に通ったことがあるが、結局初級試験にも受からず、働く術もなかったため、ますます貧しくなり、乞食になるところだった。幸い字を書くのが上手で、人に頼まれて書き写しの仕事をして飯を食っている。しかし残念ながら、彼には働くより飲むほうが好きだという悪い癖がある。数日後、書籍、紙、硯などと一緒に消えてしまう。こんなことが繰り返されていくうちに、彼に書き写しの仕事を頼む人がいなくなった。仕方なく、孔乙己はたまに盗みを働くこともある。だが、彼は当店で品の品行はほかの連中より良く、代金の支払いを滞ることはない。たまに現金がなく、記帳用の黒板に名前を書かれることがあっても、一か月以内に必ず清算しにくるのだ。

ここから、孔乙己の人物像が伝わってくる。塾に通ったことがあるから、もともと貧しい家の出身ではなかったはずである。読み書きはできるが、落ちぶれている。書籍、紙、硯などの学習用品を盗むが、品行は周りの人より良い。孔乙己は、長衫者の仲間入りすることができず、短衣者と同じところで立って飲んでいる。しかし、短衣者は、彼の不幸を話題に取り上げ、笑い種にしている。ですから、彼が店に来ると、笑い声が絶えないのだ。

科挙試験は受験者の年齢制限がなく、一生かけて受験しつづける人もいる。孔乙己が学習用品を盗むのは、おそらく引き続き科挙試験を受けようとしているのであろう。つまり、孔乙己は、落ちぶれていても、盗みまでしても、なお科挙試験の合格を目指そうとしているのである。この意味では、彼は科挙制度に囚われていて、食われていると言えよう。

次のシーンでも、「君たち」は依然として孔乙己を嘲っている。「孔乙己、お前は本当に読み書きできるのかい」。孔乙己は、弁解の余地もない表情を浮かべて無視する。すると、「君たち」はさらに「なんでお前は初級試験にも受からなかったんだい」と突っ込む。それを聞いて、孔乙己はたちまち元気がなくなり、不安な顔をし、「なり・けり・あらんや」ばかり口に、意味がまったく分からない。「君たち」はまたどっと大笑いする。

孔乙己に精神的苦痛を与えている短衣者は、労働者であるにもかかわらず、落ちぶれた人の痛みを感じないばかりか、追い打ちをかける酷薄な者でしかない。もちろん、孔乙己を嘲笑うのは短衣者だけでなく、「己」も、店主も加担している。つまり、子どもの「己」を含めて、彼に同情する者がいなく、思いやる者もないどころか、その不幸を嘲ることで生活を楽しんでいる。

以上は、「己」がカウンターの内側から見た「君たち」と孔乙己との関わり方である。孔乙己は、科挙試験制度に精神の深いところまで浸透され食われている。さらに、「君たち」によって、その精神的苦しみが一層深まっていく。その意味で、「君たち」にも食われていることになる。

4. 2 「己」と孔乙己

孔乙己が短衣者になぶりものにされている時、カウンターの内側に立っている「己」は、連中と一緒に笑っている。これは、代田が言う第一の視点である。孔乙己を笑う時、店主に叱られることはない。それどころか、店主も孔乙己を見ると、連中と同じ言葉を口にし、客を笑わせている。孔乙己を嘲る点では、「己」は皆と同じである。この場合、「己」も本質的には短衣者と何も変わらないと言えよう。

しかし、「己」は孔乙己を嘲笑しているのみならず、彼を心から蔑視しているのである。孔乙己は、短衣者と話が合わないのを知っていて、子どもたちに話しかける。ある時、彼は「己」に「読み書きを習ったか」と聞いてきた。「己」が軽くうなずいた。すると、彼は、「習ったのね……じゃあ、テストしてみる。茴香豆の茴という字は、どう書くんだ」と聞いた。「己」は、内心で乞食のような人は僕をテストする資格があるかと思っていて、彼を無視し、相手にしなかった。すると、孔乙己はしばらく待ってから、「書けないか、教えてやるから、覚えてね。……将来は店主になったら、記帳に使えるから」と言う。「己」はひそかに思う。店主になるまで相当時間がかかるし、それにわが店主は茴香豆を記帳しないのだ。可笑しくて、うるさいよ、「余計なお世話だよ、草冠に来回（往復）の回じゃないか」と言い返した。孔乙己はうなずいて、「そうだ、そうだ……回は四つの書き方があるのを知っているか」と聞きながら、指をお酒に浸してから、カウンターに字を書いていたが、興味をまったく示さない「己」を見て、ため息をし、残念そうな表情を浮かべている。

同じく読み書きができるという点から、「己」も本来、孔乙己と同じ階級に属している者であろう。だけど、居酒屋で働かなければならない「己」は、落ちぶれている孔乙己を「乞食」だと蔑視している。これは、代田が述べた「もともと「長衣」階級出身であった者という「私」独自の位置から孔乙己を軽蔑する」という第二の視点である。しかし筆者は、このシーンでは、孔乙己の優しさや親切さと対照的に、子どもの「己」がどのように振る舞い、心にどう思っていたかに重点が置かれていると見ている。そこには、同じ境遇にある孔乙己を見下し、彼より優位に立とうとする「己」がいる。

作者は「狂人日記」の中で、狂人の眼を通して、「人食い社会」を発見し、最後に「人食いをしたことのない子どもは、まだいるのだろうか。子どもを救って……」⁵⁾（童秉国編、13頁）と叫んでいる。この二作目の「孔乙己」の中では、「君たち」も、子どもの「己」も、人食いをしているという現実を具体的に描き出していると言えよう。

4. 3 消え去る孔乙己

周りの人は、孔乙己を嘲ることで単調な日常を楽しんでいる。彼がこんなに人を愉快にさせているが、別に彼がいなくても、周りの人にとってどうでもよいことだ。

もちろん、孔乙己のことが思い出される時もある。ある日、店主がつけ払いの勘定をチェックしている際、ふと「孔乙己は長いこと来てないね、まだ19文の貸しがあるんだよ」とつぶ

やいた。そういえば、「己」も長い間彼の姿を見ていないことに気づいた。客の一人がこう言った。「来れるわけがないだよ。彼の足が折られちゃった」。店主が「へえ？」と聞き返した。その客は、「彼は相変わらず盗むのだ。この前はなんと丁拳人旦那のお屋敷で盗みを働いたのだ。丁家の物を盗めるか」と説明した。「その後はどうなったか」と聞かれると、その客はまた、「どうなったか、わび状を書かされたから、殴られたよ。夜中まで殴られ、足を折られちゃった」と言った。「じゃ、折られてからどうなった」と問い詰められると、客は淡々と冷たい言葉を口にする。「どうなったって、知るもんか、死んだかもね」と。店主も、それ以上聞くこともなく、つけ払いの勘定をチェックしつづけている。

この会話から分かるように、孔乙己の足がいつの間にか折られた結果になった。それをやったのは丁拳人である。丁拳人は、科挙試験の郷試に合格し、拳人の資格を得ており、それでその地域で特権者として一目置かれる存在となっている。孔乙己の足が折られているシーンは表舞台に出ていなく、あくまでも客の話によるものとなる。特権者はいつ、どこで、何をしているのかは、他人には分からない。これが特権者の特権というものであろうか。孔乙己に肉体的苦痛を与えた人は、聖賢の書を学んだ勝ち組の者である。皮肉なことに、孔乙己は、自分がなりたいと思っている者に歩く権利さえも奪われることになった。

周りの人にとって、孔乙己が店に現れると、笑わせてくれる存在でしなく、来なくてもどうでもよい。店側にとっても、お金の貸しさえなければ、どうでもよい存在である。丁拳人にとって、孔乙己が人間として自分の足で歩く権利さえも持たないのである。これが孔乙己の存在意義であろう。

中秋節が過ぎてから、ある日の午後、店に客一人もいなかったのも、「己」は目を閉じたまま座って休憩している。突然、「熱燭一つ」という聞きなれた声が聞こえた。しかし、あたりを見ると、誰もいなかった。それで立ち上がって、カウンターの外側を見回すと、ポロポロの服を着て、あぐらをかいて、敷居に向かって座っている孔乙己の姿が見えた。その顔は黒く痩せていて、見る影もない。店主も首を出しながら、「孔乙己かい、まだ19文の貸しがあるんだぞ」と言った。孔乙己は元気なさそうに顔をあげて「それは……次回払うよ。今回は現金で、良い酒を」と頼んだ。

店主は笑いながら、「孔乙己、また盗みをしたんだな」とすぐからかった。しかし今回、孔乙己は弁解もせず、ただ「冗談はやめて」の一言しか言わなかった。「冗談だと、盗まなかったら、なぜ足が折られちゃったんだ」と店主が言い返した。孔乙己は、小声で「転んで骨折したんだ、こ、転んで……」と言い、その目は、まるで店主に向かって、これ以上言わないでくれと哀願しているかのようだった。その時に、すでに数人の客が入ってきていて、彼らは店主と一緒に笑い出している。「己」はお酒を温めてから、敷居の上に置いた。すると、孔乙己は破れた服のポケットから4文のお金を探し出して、「己」に渡した。彼の手が泥だらけ、どうもその手でいざってきたようだった。お酒を飲み終わると、孔乙己は再び周りの笑い声中を、いざっていき、姿が消えていった。ここは、代田が言う第三の視点となる。つまり、「己」

は、周りの人たちの薄情さ、酷薄さをじっと見つめているということである。確かに、このシーンでは、「己」はほとんど皆のおしゃべりに加わってはなく、黙って聞いて見ている。しかし筆者から見ると、「己」の孔乙己を見るまなざしや侮蔑している心情には何ら新しい変化も見られない。ただ、「己」のまなざしはその後の孔乙己の状況に移しているに過ぎないのである。

その後、長い間孔乙己を見ていなかった。年末になると、店主は黒板を外しながら、「孔乙己はまだ19文の貸しがあるんだ」と言った。翌年の端午節に、また「孔乙己はまだ19文の貸しがあるんだ」と言い、中秋節にはもう何も言わなかった。そして年末になっても、孔乙己の姿が見えなかった。小説の最後の叙述は、「今日に至るまで彼の姿を見ていない——おそらく孔乙己は死んだに違いない」となっている。ここは、代田の言う「我」がその運命を思いやっているという第四の視点である。しかし、その視点は小説から必ずしも読み取れるとは言えない。「おそらく」という表現から分かるように、実際、物語の後半では、この世に孔乙己の存在意義を問いている。現在の語り手の「我」は、淡々と孔乙己がこの世からそっと消え去ったことを叙述しているに過ぎないのであろう。

孔乙己のような制度的に作り出された負け組・犠牲者は、生きている時はただ人々の嘲笑の対象であるが、死ぬ時は、いつ、どこで死んだかは誰も分からないし、気にもかけない。彼に精神的にひどい苦痛を与えた者は、社会の底辺に生きる周りの人たちであり、一方、肉体的に痛めつけたのは、彼が憧れている者であり、勝ち組の人である。これが人間社会での孔乙己の生存状態である。

5 考察

以上で検討してきたように、この作品は、科举制度への批判、民衆への批判、あるいは啓蒙者に対する啓蒙というよりも、むしろ孔乙己の生存状態を通して人間の本質に迫っていると言えよう。

作品の内容から、小説の構造と孔乙己の生存状態は図1のように図式化することができよう。以下では、図1に沿って、検討してきた結果をまとめ、考察を行う。

まず、舞台の設定については、田舎町の咸亨酒店を選んでいる。全体社会が多くの田舎町によって構成されていることから、田舎町を選ぶことで、社会の全体像が見えてくるのであろう。階層化された人間社会において、そういう小さな田舎町でも例外ではない。居酒屋の内部構造も、階層に対応しており、カウンターのほか、壁で仕切られた長衫階級が使う奥の部屋と短衣階級が利用する外の部屋がある。

登場人物は、主人公の孔乙己のほか、短衣者、店主、「己」、特権者の丁旦那などがある。本稿では、短衣者、店主などの名前が付けられていない人たちを「君たち」と呼んでおり、また一人称の語り手を「我」と「己」に分けて検討し、「我」が子ども頃の「己」を見つめ、そして「己」が孔乙己、「君たち」を見つめているという二重の構造を見出している（ただし、特

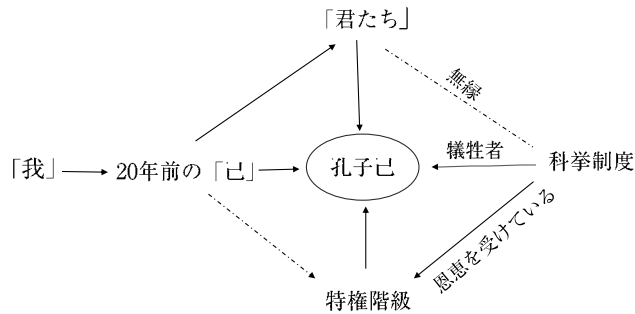


図1 小説の構造と孔乙己の生存状態

権者が孔乙己に対する扱いはあくまでも客の話によるものであるため、点線で示す)。周りの人と孔乙己との関わり方は次のようになっている。

孔乙己は、科挙試験の合格を目指してきたが、最下位の秀才にもなれなかったため、結局、困窮し落ちぶれている。しかし、読書人としてのプライドが非常に高く、ボロボロになった長衫を脱ごうとしない。人に頼まれて書き写しの仕事をして何とか生計を立てているが、引き続き受験勉強をするために、雇い主の本や筆記用具を持ち去ってしまう。そのため、よく雇い主に殴られ、傷を負わされている。だが、周りの酷薄な人に比べて、孔乙己には品行の良さ、やさしさ、温かさが見られる。この意味では、孔乙己は人間らしい人間と言えよう。

孔乙己が店に来ると、科挙試験と無縁の「君たち」にからかわれ、なぶりものにされている。「君たち」は不遇・不幸な孔乙己を嘲ったり、笑ったりして単調な生活を楽しんでいる。しかし、彼が現れなくても、別にどうでもよいと思っている。

「己」は、まだ12歳であるが、咸亨酒店で働けなければならない。本来孔乙己とほぼ同じ境遇にあるにもかかわらず、孔乙己が嘲笑われているとき、「己」も「君たち」と一緒に笑っている。それだけでなく、「己」は心から孔乙己のことを乞食同然な人と見下し、蔑視しているのである。

長衫階級の客は、店に現れると、奥の部屋に座って、お酒やお料理をじっくり堪能する。また、ほかの階層の人との交わりがまったく見られない。「己」の立ち位置からは長衫階級の様子を見ることができない。長衫階級の代表者である丁旦那は、拳人の肩書を手に入れているので、地域で一目置かれる特別な存在となっている。落第者の孔乙己とは対照的に、丁拳人は勝ち組であり、特権者である。言い換えれば、丁旦那は科挙制度の恩恵を受けている者であるが、孔乙己はその制度の犠牲者・敗者となっている。聞くとところによると、孔乙己は結局、自分になりたいと思っている階層の丁拳人によって足を折られた結果となった。つまり、特権階級の人は、孔乙己の肉体を虐げて、自分の足で歩く権利までを奪ってしまった。酷薄な民衆は孔乙己をただ口でからかっているが、特権階級のほうが残虐的な行為をする。

この小説は、人間社会において制度的に作り出された負け組・犠牲者が直面している現実を生々しく描き出している。制度化され、階層化された人間社会において、孔乙己の生存状態は次のようになっている。第一に、孔乙己は、人間が作り出している人間を選抜・選別する科举制度に象徴されるような選抜制度に魂が食われている。第二に、孔乙己は、「己」を含めた社会の底辺に生きる人たちに精神的苦痛を与えられている。不遇・不幸になっている彼に対して、短衣者は嘲笑し、同じ境遇にある「己」は蔑視している。第三に、孔乙己は、自分が憧れている階層の人に肉体的苦痛を強いられている。

最後に、孔乙己の生存状態を踏まえて、人物の名前に秘められている二重性意味について考えてみよう。

この作品は、一人称の語り手が20年前に目の当たりにした周りの人と孔乙己との関わり方を語っている。孔乙己の生存状態から、その名前に使われている三文字には以下のような意味が秘められているのではないだろうか。まず、「孔」というと、孔子とその思想体系を連想させる。ですから、「孔」は姓として使われているほか、社会において人を選別し、人の精神までに浸透し、魂まで束縛する信仰体系・選別制度の追随者、信仰者を指しているのであろう。それらの人は負け組・犠牲者になっても、なお自覚することなく、結局、自分が自分を食うことになってしまう。次に、「乙」は、中国語には一方の意味もあるので、ここでは第二者、つまり「君たち」をも指しているのであろう。それは他人の不幸を喜び、他人の痛みや苦痛を楽しむ酷薄な人たちのことである。この意味で、「乙」は、他人に精神的苦痛を与える人食いをする者を意味しているのであろう。それから、「己」は、孔乙己の身に起きていることを目の当たりにし、時には、皆と一緒に滑稽な彼を笑い、時には、優しくて親切な彼を乞食だと見なし、蔑視し、時には、他人の不幸を冷たく語る薄情な人たちを冷静に見つめる者をも指しているのであろう。「己」は、孔乙己と同じく落ちぶれている身であるにもかかわらず、相手より優位に立とうとし、相手を見下す者である。現在の「我」が何者であるかは、作品の中では触れていないが、「己」に作者の影が見られることで、作者自身も含めて、誰でもありうるのであろう。誰でも自分自身を見つめれば、人食いをする「己」がそこにいるという意味であろう。これが人間の本質である。

このように、孔乙己という名前は、人物の名前として使われているほか、もう一つ重要な意味が秘められている。即ち、「孔」は制度的に作り出された負け組・犠牲者で、「乙」は酷薄な「君たち」(民衆)で、そして「己」は自分の立ち位置から周りの人を見つめる者(傍観者)という意味が込められているのではないだろうか。つまり、孔乙己の中には、彼(孔乙己)、「君たち」(乙)も、自分「己」もいる。それから、作品の中に、特権者の丁拳人の姓として「丁」が使われている。「乙」、「己」、「丁」のどちらも十干にあるもので、10日間ごとに繰り返し現れるものとなっているため、それを使うことで、それぞれのタイプ人は、社会が存続している限り、交互に繰り返して現れることを意味しているのであろう。

この作品は、語り手にある「我」と「己」の二重性と、登場人物の名前の付け方に秘められ

ているもう一つの意味という二重性によって、人間の暗闇に光を当て、階層を超え、時空を超えた人間が置かれている生存状態と人間の本質に迫ろうとしているのではなかろうか。

【参考文献】

- 朱棟霖、朱曉進、吳義勤主編 2014『中国現代文学史1917-2013』高等教育出版社
代田智明 2006「出発の傷跡—「狂人日記」の謎」『魯迅を読み解く』東京大学出版会
竹内好 1981「魯迅入門」『竹内好全集』二巻、筑摩書房
張瓊華 2020「阿Qは何を意味しているのか」『目白大学人文学研究』第16号
張瓊華 2021「『狂人日記』の構造に秘められた意味とその主題」『目白大学人文学研究』第17号
童秉国編 2006『魯迅作品精選』長江文芸出版社
新島淳良 1979「長衣階級と短衣階級」『魯迅を読む』晶文社
藤井省三翻訳 2011「孔乙己」『故郷/阿Q正伝』光文社
劉再復 2010「魯迅成功的時代原因与個人原因」『文学的反思』福建教育出版
劉再復 2011「『孔乙己』的美学力量」『魯迅論』中信出版社

【注】

- 1) 引用したのは中国語の文章であるが、筆者がそれを日本語に訳した。
- 2) 引用したのは中国語の文章であるが、筆者がそれを日本語に訳した。
- 3) 十干は古代中国で生まれたもので、「甲、乙、丙、丁、戊、己、庚、辛、壬、癸」を用いて10日間を一区切りにし、一日ずつに名前をつけられていたものである。10日を一句となり、日付は10日ごとに繰り返されることになる。さらに十二支と組み合わせ、年や日付を示すにも使われていた。
- 4) 小説の日本語訳は、藤井省三が翻訳した「孔乙己」（2011年）を参考したところが多い。
- 5) 引用したのは中国語の文章であるが、筆者がそれを日本語に訳した。

2023年10月13日